

## 第8回「大井川知事と語ろう！新しい茨城づくり」議事録（意見交換のみ）

### 【出席者】

認定NPO法人	宍塚の自然と歴史の会
及川ひろみ氏	理事長
佐々木哲美氏	副理事長
阿部きよ子氏	理事
田上 公恵氏	監事、環境教育部会部長
嶺田 拓也氏	自然農田んぼ塾塾長、田んぼの学校校長
黒田 久雄氏	農業の多面的機能に関する調査、アドバイス
福井 正人氏	田んぼさわやか隊事務局
佐藤 和明氏	動物関係調査
阿部 朋 氏	子ども探偵団
松村 憲芳氏	里山さわやか隊事務局

.....

大井川 和彦 茨城県知事

### ○阿部(き)氏

では、よろしく願いいたします。

皆さん、発言要旨をまとめてくださっているのですが、とにかく短時間ずつ、それでご意見とか質問があったらということ。

では、嶺田さんからお願いします。

### ○嶺田氏

私は先ほど自己紹介をしましたように、農研機構で主に農村環境の地域資源管理に関する研究に携わっております。

私のほうからは、客観的に見たときの宍塚の里山の貴重性についてお話ししたいと思います。

知事は、2010年に名古屋で開催された生物多様性条約締結国会議、いわゆるCOP10を覚えていらっしゃるでしょうか。

### ○大井川知事

はい。

### ○嶺田氏

そのCOP10では幾つか重要な成果が出されたのですが、そのうちの一つに「SATOYAMA イニシアチブ」というのがあったことはご存じでしょうか。

今や、スキヤキやスシ、テンプラ、もったいないと並んで、「SATOYAMA」というのも世

界共通語となっているところです。

世界に評価された「SATOYAMA」を一言で表しますと、日本の里山管理をモデルにした地域資源の持続可能な活用システムのことを表しています。

里山と言うと、人の手が加わった自然。これはいわゆる原生林に代表されるような一次的自然に対して、二次的自然という呼び方をしているのですが、二次的自然を適度な管理によって持続可能なシステムを成立させるということが、「SATOYAMA イニシアチブ」のねらい、趣旨となっています。

宍塚の里山の特徴としましては、先ほど及川さんの話にもありましたが、構成要素としまして、雑木林だけではなくて、田んぼがあって、畑があって、湿地があって、草地があるという多種多様な要素で構成されていることが特徴です。また、それぞれの構成要素に対して、人の適切な管理が加わってさまざまな機能を発揮しているということが、全国でまれに見る里山のシステムが残っているところです。

その一つの成果としましては、例えば、イナリヤツという里山の中に小さい25アールほどの湿地があるのですが、そこで7年ほど前から茨城県自然博物館とともに植物の調査を行っておりまして、そこで幾つか、ニラのような形で生えているミズニラという湿地の植物とか、高さが10センチぐらいのマルバサワトウガラシ、いずれも全国でも貴重な植物が10種ほど今確認されているところです。

宍塚の里山には、私も含めて、研究学園都市の研究者自身やその家族の方が年間多く訪れています。私たちにとっても貴重なフィールドであると同時に、私たちの子ども、将来的にサイエンスを担ってほしいなと考えているのですが、その子どもたちにとってセンスオブワンダーを与え続けてくれる貴重な場となっております。

このような立地性、機能性、希少性、モデル性に秀でた宍塚の里山を知事にもぜひ訪れていただいて、貴重な茨城の資産として捉えていただいて、この里山エリアだけではなくて、周辺のバッファーとなるゾーンの整備、環境も含めてご協力いただければと思っております。

## ○阿部(き)氏

では、次に、調査を担当しています佐藤さんから。

## ○佐藤氏

先ほど及川会長から紹介がありましたように、ここの活動はもう既に30年ということになっているのですが、1990年あたりから既にここの生物相調査というのはかなり丹念にやられておりまして、1995年に「宍塚大池地域自然環境調査報告書」という結構大部な報告書が出されております。

宍塚の会は、発足当時より調査活動をかなり重視してきたということがあるかと思いますが、そういうことを背景に環境省のモニタリング調査1000の里地調査のコアサイトとして選定されました。そして、2005年からこのモニタリング調査、植物、鳥、水環境、哺乳動物並びに指標生物としましてカヤネズミ、カエル、そしてチョウの調査がこれまで継続して行われてきております。

私は、既に15年間、チョウの調査を行ってきたのですが、この15年間の中でも、ある種は衰亡し、ある種は増えていることが観察されています。この増えているのは、多分温暖化の関係で、今まで関西地域にしかいなかったチョウが結構この茨城県に最近増えているようなことがあります。

一方、この里山の自然環境の変化、つまりこれまでの雑木林に、今、タケだとかササが入り組んでくる。あるいは松林がなくなっている。それから、草地、草原がかなり少なくなっている。こういうことがありまして、この影響である種のチョウはほとんど少なくなっているなという結果が今、得られつつあります。

50年前、私が中高生時代には、里山の雑木林はもっと明るい林だったと思います。その中に入りますと、昆虫は数も多く、種類ももっといっぱいいたという原体験を持っております。

毎年、毎月こうしたモニタリング調査を行っていきまして、非常に地味な調査なのですが、このデータを蓄積していきまして、私としては、10年単位で生物相の変化を見ていくことが必要なのではないかなと思っています。

それとともに、現在実施しつつあります里山の整備、木を切ったり、竹林を除いたり、草地を刈ったりする作業ですが、こういった里山の管理作業が、課題となります生物多様性の確保というところとどういうふうに関連していくのか、一つでも多くの検証データが得られれば良いなと考えています。

県内、あるいは県外も含めて、関係する諸団体との連携・協力も頭に置きまして、着実に調査活動を進めていきたいなと思っております。

## ○松村氏

里山の保全について語らせていただきます。

活動のモットーは、「好きなことを、無理せず、楽しく汗を流すことにより、里山の保全に役立つ」ということで進めております。

当会の保全活動は、30年前、1990年2月から、知事の隣にいます佐々木さんたちが活動を始めました。

定期活動としては、毎月第2、第4日曜日、9時から12時に行っております。

定期活動としましては、里山の散策路の整備、里山の調査・保全、侵入竹の除去、環境教育・森林学習、田畑整備、池の保全、企業との協働活動、昨日もやったのですが、コマツとの協働、あとは、毎年恒例になっている「春の里山ゴミ拾い大作戦」などを行っております。

会の活動がいろいろと理解されるにしたがって、活動フィールドも年々増えてきております。フィールドの数としては40カ所、広さとしては、会が持っているのが4カ所の1.3ヘクタールに対して、20ヘクタールを今管理させていただいています。

昨年度の活動なのですが、約35回、375人の参加がされています。

しかしながら、単発的な助成により、倉庫とか刈り払い機、チェーンソー等々の整備はできてきたのですが、活動には、ガソリンとか機材整備など継続的に経費が必要なところが課題に上がっているというのがあります。

## ○福井氏

私は、地元との協働ということで、田んぼさわやか隊と米オーナー制という2つの部会を主に担当していますので、これについて説明させていただきたいと思います。

里山というのは、昔から人々が適度に手を入れることによって自然と共生して成り立ってきたところなので、私は、人と人とのつながりが里山をこれからも守っていくものだと思いますので、今までずっと里山を大事にしてくれた地元の人との活動を第一にしないといけないということで、その活動を中心的に行っています。

今、里山の周りにも水田地帯が結構広がってしまっていて、それが桜川を挟んで対岸のほうにあって、筑波山のほうまで広がっているのですが、それが重要な生き物の通り道にもなっています。ただ、今、高齢化とか担い手不足とかでなかなか農業がうまくいかないということで、地元の人も困っているということで、我々としては、逆に、少しでも農作業に親しんでみたいという思いもありますので、win-win の関係みたいな形で、では一緒に取り組もうということで、「田んぼさわやか隊」という名前をつけて実行しています。

もう一つが米オーナー制なのですが、とれたお米を、里山のファンの人に、里山が好きでも、ちょくちょく来られない方もいらっしゃるの、そういう方にお米を届けまして、応援してもらおうとか、里山の味を味わってもらおうというような活動をしております。

本当に宍塚の里山自体も魅力的なところですので、そういうような活動を通して、宍塚のお米をアピールすることができれば、宍塚やお米を通して茨城のよさとかを全国や世界までアピールできればいいなと考えて活動しています。

## ○阿部(き)氏

ここまで、皆さん、保全する意味とか、生物多様性の意味とか、ここをどのように保全するかということを中心に活動をされている方のお話なのですが、その辺でご意見とかございますか。

## ○大井川知事

ありがとうございます。

お聞きしていて、すごく感銘を受けたと同時に、すごく不思議だなとも思ったのですが、そもそも里山って、ある意味、人間の生活スタイルと自然との関わりの中で生まれてきた空間ですよ。今、そういう人間の生活スタイルが失われて、昔のような生活スタイルが変わってきてしまって、里山というのはそのまま維持するのはなかなか難しい中で、そこで農業をやっているとか、そういう生活をしているわけでもないのですが、皆さんがこの宍塚の自然を守るという形でこれだけ集まって、あんなすごい草刈りや、木を払ったりとか、すごい作業もされていて、何でこれが継続できているのかなというのは私にとってはものすごく不思議で、ちょっとずつお話を聞いていたのですが、学術目的の方もいれば、そうでない方もいらっしゃる、何が秘訣なのかなとずっと考

えながらお聞きしていました。きっと答えはまた最後に出てくるのではないかなと思っているのですけれども。

本当に自由な意思で皆さんがこうやって集まって、NPO法人としてこれだけ活発な活動をされている秘訣は何なのかというのを最後に理解して帰りたいなと思いました。

### ○阿部(き)氏

それでは、楽しんだり、研究も含めてですが、実際にどのように活用しているかというのを皆さんで話をしてから、何が魅力でみんなこんなことをやっているのかというのを、また最後のほうでお話したいと思います。

### ○黒田氏

茨城大学農学部黒田です。

私は、農業土木で灌漑排水をやっております。水田の灌漑用水として水質をよくしたいということで、霞ヶ浦の水質保全とかにも関わってきています。

大池というのはもともとため池なので、農業用水としてありますが、実は、ここの大池のCODが霞ヶ浦の3倍ほど高い濃度になっています。何も汚染源がないのに高くなっているということが、もしかしたら霞ヶ浦の水質改善に関わるような解決策を提示できるのではないかと、今、研究を行っています。今年から省エネ型の曝気装置を入れさせてもらって、活動を開始しています。

また別件なのですが、今、霞ヶ浦の水質改善のために、以前に、湖底の浚渫をして、浚渫土を取り出して水質改善をするということをやっていたのですが、その浚渫土を使って大きな干拓地のかさ上げ工事を現在しています。大体300ヘクタールぐらいの大きな農地をつくる場所なのですが、そこに、スマート農業というのが一気に広がろうとしているので、そういう大きな300ヘクタールぐらいの農地を使ってスマート農業をする。ここにコマツの農業ブルドーザーが入ってきていますので、それを使って実験を行う。

実は、土地改良法にしる、河川法にしる、スマート農業だから、大区画をつくるということは、どうしても環境配慮をしなければいけなくなっています。その場合、茨城県南で環境配慮をするときの一つのモデルケースとしてこの里山の環境が非常に重要になってくる。すなわち、ここの里山の環境を守ること、また、1回荒れましたので、それを復田していくことによって、絶滅危惧種とかもまた再生されていますので、そういうものを使いながら、大区画のスマート農業にも当てはめて、環境保全をしていきたいということをしております。

ですから、最先端のものと伝統的なものを融合させたことが、おそらく、茨城の農業として、これから生産性の高いものができるのではないかと、ここに関わっています。

### ○大井川知事

ある意味、自分の仕事と利害がマッチする人は何となくわかりやすいのですが、そう

ではなくて、これだけの方がこの会に入っていて、継続的に関わっていらっしゃるというのは、普通に自分の生活の中で里山が自然につくられて守られているという状態だったら、それは昔の話なのでしょうけれども、そうではない皆さんが相当熱心に活動されている一番の魅力は何なのですかね。

#### ○阿部(き)氏

後でまた皆さんに、何でそんなに一生懸命やっているのということを聞いてみていただければと思います。

次に私から。

私は歴史部会の活動をしてきました。この会はこの地元の人ではない人が多い。宍塚地域の会員さんももちろんいらっしゃるのですが、東京都や他県からやって来ている人が多い。

#### ○大井川知事

茨城県に住んでいる方ではないのですか？

#### ○阿部(き)氏

いえ、だいたい生まれは違うけれど、今は土浦市つくば市に住んでいるという方々です。他からきて、はじめて、この里山を訪れて、いいところだねとびっくりします。地元の方は、こんなの当たり前だよと思っておられるようでした。歴史的に価値がある場所で、この貝塚は国指定の史跡で、国の重要文化財をもつ般若寺もありますし、古墳群もあって、遺跡だらけです。私は歴史を学んできたものなので、狭い中に貴重な遺跡史跡が集中しているこの宍塚地域について知りたいと思いました。もう一つは、里山って、人の関わりでできてきたものですから、一つずつ非常に個性があって、同じものはない。宍塚の里山の個性を知りたい。そこで地元の方々にお会いして、お話を伺いました。どこの土地はどのように利用してきたか、どこでどんなことが行われてきたか、キノコはどうだったかなどと聞くことによって、昔と今との違いもわかってきます。私たちは、随分熱心に、しつこくしつこく、たくさんのお宅に伺いました。記憶力のいい一人のおじいさんの所などには、何十回通ったかというくらい伺いました。それで、植物の変化、キノコはこれがおいしかったのに今は全然ないとか、そういうこともわかりました。おいしい料理のつくり方なども習って、それが今、いろいろな場面、行事などで活かしています。

歴史部会の課題としては、私たちよりもっと若い世代がこの地域、里山の暮らしの歴史を引き継いでいく機会をどうやって作っていったらいいのだろうか、昔の人たちの厳しいけれども楽しみもいっぱいあったという里山での暮らしと人々の結びつき方のことを若い世代にどうつなげていったらいいのかということが、全国的にそうだと思いますが、一つ、気になっているところです。

また、私は田んぼの学校というのを担当しています。これは1995年から大人も子どもと一緒に谷津田の復田をして田んぼ塾ということでやっていたのですが、子どもは、学

ぶことを中心にしてやったほうがいいだろうということで、2012年から独立した区画を設けまして、大体定員25家族ということで、親子で取り組んでいます。

今年も、まだ募集期間ではないのですが、問い合わせが来ています。マンションに住んでいたり、つくば、土浦に最近引っ越してきた若い家族がほとんどです。こういう体験をさせてやりたかったとか、自分もしてみたかったとか、こんなにいいところがここにあったのかということでやって来られて、何年間も、子どもが幼児から小学校卒業まで長く続ける親子もあります。足踏み脱穀機で脱穀するのは少し難しいのですが、脱穀でも稲刈りでも何でもとても上手になっている子どもたちもいて、初心者もいる中で、親も子どもも学び合っています。そして、親子ともに本当によく働いています。私は農業体験はなかったのですが、嶺田さんに校長先生をやっていたいただき、知恵を貸していただいています。今は餅米と藁細工用の藁を作っています。12月には地元のお年寄りに講師をお願いし藁細工の教室でしめ縄などを親子みんなで作りましたが、大変好評でした。今年のアンケートの感想では、「毎回、子どももわくわく、親もわくわくして楽しんで参加しました。」などと書かれていました。「学校」なので、今の農業のやり方だところだけけれども、ここでは、昔からの基本的なやり方でこうやっている、と、比較して学んでもらいます。毎回日誌をつけ、課題も出したりしています。

里山に、4月の種まきから1月まで通いますので、自然との親しみ方が大変密着するとか、濃くなります。中学生になってもこの里山に来て、時々、駆け回っている子どもたちがおります。ここがふるさとみたいになっている子どもたちが育って、田んぼの学校はいい取り組みだなと思っています。子どもと一緒に、こちらもとても学べるので、楽しいです。

では、次に、阿部朋さん、お子様子育て中の方です。

## ○阿部(朋)氏

私が担当しているのは子ども探偵団というところになるのですが、月に1回、土曜日開催して、毎回約20人前後のお子様とご家族の方が参加されて、一緒に里山を駆け巡るというようなことを行っています。

私自身は、房総のほうで、毎週末、山の中で過ごすというような生活をしていたのですが、宍塚の里山は房総よりも非常に自然がはっきりわかる、四季がわかるのが魅力ではないかと思っています。草木が芽吹く春であるとか、緑まぶしく生き物が活発になる夏、稲やドングリが実って紅葉がきれいな秋、それから、凍える寒さの中、渡り鳥が飛来する冬、というのは、非常に宍塚の魅力の大きなところだと思います。1年を通じて多様な自然に触れるということは、子どもたちにとってもかけがえのない思い出になると思い、けがをしないように一緒に楽しむという形で活動しています。

参加する子どもたちは、未就学児から小学校低学年ぐらいまでしか来ないのですが、花や虫、ドングリなど、いろいろなものに興味を持って、初めて会った人でも仲よくなくて、一緒に共有しながら思い思いに楽しんでいるというようなイベントになっています。

夏は、小川に入ってザリガニやカエルをつかまえてみたり、冬は、木々にはしごとかロープをかけて、木登りやターザンごっことか、なかなか近所の公園ではできない遊びもやって、非常に楽しく、私も子どもを連れてきているのですが、一緒に楽しんでいます。

一つ、課題が。近所の公園にあって里山にないもので、うちの会ではトイレが仮設トイレしか準備できなくて、子どもたちとか男の子なんかはいいのですが、女性陣はなかなか厳しいというので、この辺を行政のほうで少し考えていただけたらうれしいかなと。参加者ももっと増やしていきたいと思っていますので、何かお力添えをいただけたらうれしいです。

## ○田上氏

環境教育を担当しております田上と申します。よろしくお願ひします。

宍塚の里山で行われております環境教育には、今、いろいろと報告がございました保全活動を通して行うものと、整備、再生された里山に来ていただいて行うものがあります。

保全活動を通してというのは、会長さんから、スライドを通して、また、こちらのテーブルについている方たちからいろいろと報告がありましたとおり、小学生から中学生、高校生、社会人まで、たくさんの方が関わって保全活動を行っています。

そのような保全活動を通して、よみがえった里山に招いて、来ていただいてという環境学習なのですが、年間 80 回以上開催しております。

例えば、専門家を招いての自然観察会、これは毎月です。それから、毎月開催する子ども探偵団、毎週行われます土曜観察会、季節ごとに夜行われます昆虫観察会、こちら子どもから大人まで一般の市民の方々が自由に参加できるということで、無料で行っておりまして、里山の生き物に触れながら里山を体感できる機会になっています。

中でも、会の発足当時から 30 年間、自然観察会を毎月開催しておりまして、研究所や自然博物館の先生、大学の先生、専門家にたくさんご協力をいただいております、多様な講座を設けております。とても人気のある講座でして、多いときは 90 名ぐらい、少ないときでも 20~30 名ということで本当に賑わっております。

子ども連れの若いお父さんなのですが、子どものころは、網を持って、その辺の川や林で生き物をよく捕まえたのだけれども、今はそういうことができなくなってしまったということで、こちらの里山に来て貴重な体験ができましたという感謝のお手紙をいただいたりするのですが、たった 30 年、40 年の間に、自然環境が失われて、身近な生き物が消えているということなのです。

これから先、また 30 年、40 年はすぐ来てしまうと思うのですが、さらに私たちの身近では生き物が減少していくことが考えられます。その時はこの里山の価値がさらに高まっていくのではないかと思います。宍塚の里山は、未来に引き継いでいく価値のあるものだと思います、日々活動しています。

また、このような環境学習会に参加できる子どもたちというのは、親が自然とか環境に意識の高いお父さんたちが参加することが多いのですが、親の関心にかかわらず、多



く子どもたちが里山体験をしていただきたいというのが私たちの願いなのです。

そこで、教職員の先生方への研修の一環としてこの里山体験を位置づけられると、広く児童生徒さんたちの環境教育により影響を及ぼしていただけるのではないかなということを考えております。

#### ○阿部(き)氏

では、佐々木さん、全面的にいろいろなことに関わっている方です。

#### ○佐々木氏

佐々木といいます。

私はゼネコンの土木技術者として、工事現場に29年出ていました。

土浦でここから8キロぐらいのところに木田余東台というところがあるのですが、そこを32年ぐらい前に造成工事をやっていて、土浦が気に入ってそのまま家を建てて住み着いています。

区画整理を二、三個、千葉のほうでやっていたので、区画整理する場所でいいところがないかと探していたことと、区画整理をやっていると、地権者交渉で、怒られたりしますので、私はこれだけいいことをやっていると思っているのに、何で反対にあったり怒られたりするのかと疑問に思っていました。

また、反対している人たちはどういう気持ちでやっているのか知りたくて、宍塚の自然と歴史の会に参加しました。

まず気がついたのは、ここへ来て、ここを区画整理で開発するのかと愕然としました。景観とかそういうもので、残すべきものは残す。それと、区画整理そのものが結構下火だったので、このまま続けたら事業性が見込めないのが、将来、取り返しのないことになる。その中で、私は区画整理士の資格を持っていますので、そういう専門的な知識を持った人が加わることによって、少しはいい活動ができるのではないかとということで、腹を決めて一緒に活動し始めました。

ただ、行政にはインフラ整備という重要な役割があり、土地を持っている人は私有財産を守らなければいけないという重要な使命があるわけです。

我々市民にはどういう責務があるかといったときに、背負っているものが全然違うわけです。嫌になったから明日から来ないと言っても何ら経済的には損することはないわけです。こういう背負っているものが違うのに、対等なことを言っているのかということ私には会の中でずっと言い続けてきました。

まず、我々は、自分の行動とか言葉に責任を持つ。汗を流した分だけ、一言、二言言わせてもらうよということで、里山さわやか隊とか田んぼ塾とか、そういうものを立ち上げたら、うまく皆さんが引き継いでくれてやってきているというようなところがあります。

ですから、私もこれからどうしていくかといったときに、いくらいいところだからと言っても、お金やいろいろな制限があるから、残そうといってもなかなかできないわけです。その中で、我々が何をできるかということで、一つ一つ積み上げてきたのが今の

宍塚の自然と歴史の会の活動になります。

今、地元の人たちの協力によって我々は好きなように活動させてもらってやっていますが、いつまでも地元の方の好意だけに甘えるわけにはいかないと思っています。これから相続だとかいろいろな形が出てくると、維持できなくなる。現に、周りからアパートや太陽光発電などが、どんどんできてきているわけです。

ですから、都市計画決定、地域指定か何かで、とりあえず無秩序な利用をまず押さえる方法はないのかなということです。そういう形で行政の方と一緒に勉強していければなと思っています。

もう一つは、我々で何ができるかといったときに、今、1.3ヘクタールぐらいは会のほうで土地を持っているのですが、これを何とか寄附を集めて増やしていく方法はないだろうかと考えています。その一つの手法がナショナル・トラスト運動ということで、知床とかいろいろなところで自然環境を守るためにやっていますが、それを始めようかということで、ナショナル・トラスト協会というところから調査費をいただいたのです。それをもとに調査を進め、我々にどこまでできるかわからないのですが、自分たちで少しずつ土地を確保していきます。

ただ、我々がやることは微々たるものでしょうから、将来的には行政と一緒にやっていかなければ目的の達成はないと思っていますので、よろしくお願いします。

#### ○阿部(き)氏

皆さん、いろいろなのですが、どのように里山を活用しているか、実際に環境教育に使ったりしているなどの話だったのですが、この辺で、皆さんがどうしてこんなお金にもならないことに一生懸命やっているのかは、またこれから伺いますが、今のところまでで何かご質問はありますか。

#### ○大井川知事

特に、今の佐々木さんのお話は結構重いテーマをお話しいただいたと思うのですが、今、この宍塚の里山は、この会で持っている1.3ヘクタール以外は、農家の方がそれぞれ地権者として持っていらっしゃるのですか。

#### ○及川氏

はい、そうです。

#### ○大井川知事

民有地で。

#### ○及川氏

5分の1ぐらいは土浦市の土地ですが、それ以外は誰かの私有地です。

#### ○大井川知事

そういう私有されている方は、その里山を何かに使われているのですか。

### ○及川氏

里山を使っている地元の方はもうほとんどおられなく、ただ、今日区長さんや地元の方が数名ご参加いただいています。要するに、私たちが活動できるのは、地元の方のご理解で土地を無償でお借りすることができているので、1990年から里山の保全活動が行えているのです。

地元のご協力がなければ、日本中どこでもそうですが、公有地ではない場所での里山保全というのは、大変苦戦されている方が大勢いるのが現状です。

1990年から地元の方から出入り自由という許可をいただいた、多分、全国で初めての事例だと思いますが、運よく使えるようになったのです。

その後、聞き書きを通して地元の方との交流が密になり中には昔の思い出を語りたくないと言われた方もありましたが、協力してくださった方が大勢おられましたので、その結果として、今では、里山内45カ所で保全活動が行えているのです。

### ○大井川知事

すばらしいですね。

皆さんのお話を聞いていると、50年前、私が土浦に住んでいたころを思い出すのですが、ちょうど土浦北インターのすぐそばの6号沿いにある板谷という場所で、あの当時だと、まさにこの里山みたいな感じで、一歩外へ出ると、明るい雑木林があつて、虫も取り放題だし、草っ原もあつて、バッタとかいろいろなものがいくらでもあつたというか、自然と一緒に、水田も広がっていましたから、本当に幼少期はいいところで過ごしたなと今でも思っているのですが、そういう自然はほとんど見られなくなってきていますよね。

茨城県だと、大子とかへ行けばわかりやすくあるのですが、そうでないところは、ある意味、本当に荒れ放題の山林みたいになっているので、そういう意味では、里山という環境が貴重だというのは私もすごくよくわかるのですが、それを維持するのはもっと大変だろうなど。

だから、皆さんのように、多様な関心をお持ちの方がこれだけまとまっていらっしゃるといのはすごいことだなと、話を伺っていて思います。

### ○阿部(き)氏

では、皆さん、どういう動機でそんなに一生懸命活動しているのか。魅力はこういうことなんだと、そのあたりを語っていただけませんか。どうですか。

### ○松村氏

私がここに来た最初のきっかけは、自然観察会という月1回やっている観察会でした。私には3人子どもがいるのですが、子どもたちとそこに参加して、この心地良さを知りました。仕事上、建設コンサルタントで、ダムとか河川とか、そういうものに携わっ

てきました。人間が関与することによって、環境をかなり破壊してきたことに心を痛んでいました。そんな時に、癒されたのがこの場所でした。その場所を自分が居て、少しでも自分がいて気持ちいいところにして行きたいなと思って活動しています。あとは、孫たちができたらここに連れてきたいということです。

また、私が初めて週 1 回活動している土曜観察会に参加した時、小さな子供さん連れの親子と一緒に参加でした。小さいお子さんが、草が刈っていない所で立ち止まり進めませんでした。観察路の草の刈っていない所は、ちいさな子どもが弱いと感じました。この体験から、里山を維持していくのは大変だなと感じながらも、立ち止まってしまった子どもを思い出しながら、子どもが少しでも安心できる場所にしたいと思って活動しています。

### ○大井川知事

お子さんでも興味を持ってくれるのは、小学校の低学年ぐらいまでですかね。

### ○松村氏

そうですね。

### ○大井川知事

その上の学年になると、みんな自分たちの学校生活とかがあるから、なかなか親が誘っても来てくれなくなるのではないですか。

### ○及川氏

そうですが、学校単位で、土浦第四中学校科学部だったら、科学部の生徒たちが毎月のように宍塚で竹林の調査、竹林にはなぜ下草が生えないのかとか、里山に広がる竹林の脅威とか、そう言った研究をしながら、それと同時に、竹を切るという体験活動、また、竹を中心にしてバームクーヘンをつくる楽しい活動行う、そんなことをするグループが、もう十何年間活動しています。今日もこの活動を始められた方が来られています。だから、さっき田上さんが言われた、先生が関心を持てば。子ども達も関心をもつようになるのではないか。「先生」が一つのキーワードのように感じます。

また、つくば市の県立竹園高校が自然農田んぼ塾で活動しているのも、先生が自然体験についてとても意欲的なことから生徒達が大変積極的、意欲的に取り組んでいます。高校生になると、とても深い研究のきっかけを作ることにもなり、世界湖沼会議でも高校生の代表として発表しました。学校単位の取り組みはと大変大きな成果をもたらします。

### ○阿部(き)氏

私は田んぼの学校とかで子どもたちと接してきたわけですが、早くから通っていた子どもたちがもう 30 歳近くになっているわけです。大人になって何をしているか、親ごさんから聞くところでは、大変タフな子どもたちが育っているなという感じがします。

田んぼの学校で何年間もやっている子どもたちを見ていても、どんどん働き者になり、自然の観察も鋭くなりということが言えて、私も歳を取ってきていますが、彼らの刺激によって、また新しい発見がとともあって、「楽しいね、子どもたち面白いね」と年配者どうしが言いあっています。

ずっと幼児から小学校卒業まで来ていたような子たちが、大人になって活躍していることを聞きますと、意欲的な親の子どもだからと言われてしまえばそうかもしれないけれども、子どもたちの興味関心、探究心とかが、よく育っているなと思います。それを見ながら、こちらも負けてはいられないぞと思っているわけです。

### ○大井川知事

そこでできた子どもたちとの人間関係というのはずっと続いているのですか。

### ○阿部(き)氏

親ごさんからは、次にあの子たちが子どもを育てるときにはまた連れてくるからといわれたりしています。

### ○大井川知事

そうですね。すてきですね。

### ○及川氏

活動で感じるのは、テーマを決めて毎月観察会を行っていますが、キノコやヘビなどいろいろな観察会をするのですが、継続して何回も来た子は本当にさまざまなことを身につけます。1回だけ観察会に参加した子は、興味のあることに参加した子はそれなりの成果を上げますが、一般にはそれは薄いのです。それで、学校を対象にした観察会、年に4回来ることというのを学校にお願いして、年4回、春夏秋冬来るようお願いしました。

4年生対象が多かったのですが、4年生最後の観察会には3年生の先生も参加していただいて、次の年の4年生が来られるように、必ず観察会が繋がっていくような工夫をしながらやっていました。1回よりは、回を重ねて活動することが、子ども達の影響が大きいことを実感しています。

### ○田上氏

私は自然観察会に関わっていて、自然観察会の当日の運営とこの記録をまとめて会報の「五斗蒔だより」に掲載するのを大きな仕事にしているのですが、ない頭を働かせてつくるのはちょっと大変なのですが、写真を入れたりとか文章を校正したりということで頑張っています。自分は老化防止ということで頑張っているのですけれども。

今月は野鳥なのですが、来月は般若寺の石仏について観察会を行い、石仏についても頑張っておまとめしたので、ぜひ読んでいただければと思います。

まとめるのも大変なのですが、これが楽しい。皆さんが読んでくださっているのかな

と思うと、頑張れるという感じです。

**○及川氏**

会報の最後のページ、これは子ども向けのお知らせですが、これを、毎月、一万六千何百枚を、土浦・つくばの小学生、幼稚園に配っています。このお知らせによって観察会、子ども探偵団、田んぼの学校など子どもが活躍する活動には子どもの参加が多いのです。広報活動は大変根気のいることですが、このお知らせがなかったら、多分伝わらないですね。

**○田上氏**

しかもこの絵がすごくすばらしいですよ。専門家が協力してくださるのです。

**○阿部(き)氏**

会員にいろいろ才能のある人がいます。

**○大井川知事**

何人ぐらいの方がいるのですか。

**○及川氏**

400人ぐらいです。

**○大井川知事**

400人ぐらい会員がいらっしゃるのですか。

**○及川氏**

はい。2月で390人と書いてありますが、会報に人数を書いています。会に参加している人はかなり専門的な知識を持つ人が多く、個性豊かな、魅力的な人達が、お互い刺激し合い、人が人を呼び、活動が広がり、継続できているように思います。

**○阿部(き)氏**

それから、いろいろな人、職業の方たちがいます。自分の職業生活の中では全然出会えなかったような人たちが集まっているのが魅力です。

**○大井川知事**

皆さん、どういうきっかけで集まるのですか。

**○阿部(き)氏**

観察会だったり、里山さわやか隊に誘われたり、田んぼに興味があったりとか、何かのきっかけで来ているのですが、研究者の方もいれば、JICAでずっと海外にいた方もい

れば、土木に詳しい人、そして、地元の方などいろいろです。

### ○大井川知事

特に公に勧誘するとか、募集するとか、宣伝するとかせずに、みんな、口コミみたいな感じで集まってこられるのですか。

### ○及川氏

福井さんはどういう形でこの会をお知りになったの？

### ○福井氏

私は、先ほど知事が言われたように、もともと子どものころは自然の中で育ってきたので、生き物とかが好きで、大学も農学部に入っていたのですが、その後、社会人になって、農業関係の仕事に就きましたが、自分で農業をするようなものではなく、農家の人に物を売するような仕事をしていました。農家の人との触れ合いは楽しかったのですが、もっと環境そのものに対する仕事をしたいなということで、10年近く前に、環境の勉強を試みようということで、会社を辞めて環境活動に舵を切りました。

そのときに、半年間ぐらい、まず資格の勉強もして、ただ実践を伴わないと実際に入っていけないなということで、地元で自然保護とかそういう活動をしているところはなかなか探していたところ、どこかの交流館みたいなところに会のリーフレットが置いてあって、里山さわやか隊に最初に参加したのですが、最初の1年間はまだ仕事をしていなかったで、それこそ全ての部会に毎週通うような感じで出ていました。

でも、それが縁で、先ほど人と人との関わりを大事にしたいということと同じでそこから、道が開けて行って、今は環境学習とかをメインにやっているような仕事をさせていただいて、以前には県の霞ヶ浦環境科学センターにも嘱託で5年ほどいたのですが、今の職場もそれが縁で働いているようなところがあるので、茨城県さんともいろいろ仕事をさせていただいています。

そういう意味で、里山を通じて自分自身も新たな道が開けたという形で、自分自身はとてもよかったなと感じております。

### ○大井川知事

環境が、ある意味、仕事というか、人生の一番のメインストリームという方と、また、農業関係で研究されている方と、あとは、土木関係の仕事をされていて、自然の大事さに気付いたということでしょうか。

今までやっていた土木関係だと、自分の開発とかそういうことの意義を確かめたいみたいなのところもあるのですか。

### ○佐々木氏

元々、人のために、地図に残る仕事をやりたいということでゼネコンに入ったわけですが、いろいろと悩んだ末に、やっと今、人に喜ばれて、地図に残る仕事が見えて

きたかなというようなところでは。

○大井川知事

でも、ある意味、環境保護ということと時々ぶつかるお仕事でもあるわけだから、その辺は。

○佐々木氏

以前は散々言われましたよ。自分のやっていることと職業と矛盾しませんかと。ただ、もともと、人命と財産を守るのが土木の仕事なわけですから。こういう環境関係が厳しくなってくると、そこに土木、技術を持った人間が関わらないと、何のために技術があるのだというところを、わーわー言いながら、今までやってきました。

○大井川知事

なるほど。あとは教育関係の方ですかね。

○阿部（朋）氏

私も、子どものころに、父に連れられて、中学からつくばに引っ越してくるのですが。

○大井川知事

そのころに参加されたのですか。

○阿部（朋）氏

自然観察会、テーマ観察会なんかはたびたび参加していたのですかね。

○大井川知事

では、卒業生が戻ってきたパターンですね。

○阿部（朋）氏

いえ、というわけではないのですが、子どもを育てるのに、お散歩をするのにも、街中は足元が固いので、里山を歩きたいなということで、子どもと一緒に土曜観察会とかに参加して、それで誘われてという感じで入会して。やっぱり入会しないと、好き勝手遊ぶにも、お散歩するにも、少し肩身が狭かったかなというのがあったかと思います。

今日もうちの子がこの会場に来ていまして、うちの子も、皆さんにかわいがられて、将来楽しみと言われていますが、どうなることやら。

○大井川知事

この里山は一般の人でも自由に入れるのですか。



### ○及川氏

もちろん、もちろん。しょっちゅうお散歩に老若男女、色々な人が来ていますよ。上高津貝塚は里山に隣接していますが、貝塚に来られた方が連日大勢足を延ばし宍塚大池に来られます。初めて来られた方は、異口同音、こんないいところがあったのかとびっくりされます。

### ○大井川知事

そうなのですね。

### ○阿部(き)氏

すぐ近くに保育園があるのですが、定期的に小さな子どもたちが里山の中に入って活動していますし、特別支援学校の人たちも来ることがあったりします。私たちのところに案内してくださいというのもあるし、自分たちで来る人たちもいるし、地元の方々のお散歩コースにもなっています。

私は、昔、東京に住んでいたのですが、埼玉のほうへ行けばいくらでも里山はあるという感じで、そこで遊んでいました。こちらに親が引っ越してきて、宍塚大池へ行ってみたら、気持ちいい。でも、埼玉の方だっていくらでもあるよと思いました。ところが、子どものときに行っていた埼玉の昔馴染んだところに行ってみたら、西武が開発してしまって、まるで違っていたのです。宍塚大池みたいなのところはどこにもあるよと思っていたら、あら、ないわって。気がついてみたら、ほかにはもうなかった。それでこの魅力にとりつかれました。ストレスの多い仕事をしていたとき、ここはおやつを食べる場所、ここでは本を読む、とスポットをいろいろみつけて過ごしました。本当に憩いの場になりました。そして、観察会に参加することからはじめて、いろいろ関わるようになりました。そして、地元の方との触れ合いがありました。きびしい時代、過酷な労働を経験し、乗り越えてこられた皆さんが非常に豊かなものを持っていらっしゃいました。私は、都会の人しか知らなかったのも、そこにショックなほど衝撃を受けて、とても多くのことを学ぶ機会になりました。

筑波研究学園都市で育った人たちが、学園都市をふるさとと思うかどうかという調査を行ったつくば市出身の若い民俗学の研究者がいるのですが、ふるさとだと思っていないという人が結構多かったといいます。だけど、こういう場所にしょっちゅう来ていたら、自分のベースと思えるのではないのでしょうか。学園都市の中だけで暮らしていたら、そこが自分のふるさとだとはなかなか感じられないのではないかと思うのです。子育てするのに、こういうところを求めていましたという新住民の方が多いです。

### ○及川氏

1冊目の本を出版した後、ご協力くださった方やそのお知り合いの方に本を差し上げたました。地元の方が、君たちが騒いでいるからこの場所は有名になったのかと思ったけれども、埼玉の親戚の人に来てもらったら、もうびっくりしていた。本当にいいところなんだと始めて宍塚の良さに気づかれたご様子でした。

近過ぎるとわからないとよく言いますが、地元の人たちでさえ知らない里山の良さを分かってもらうためにはどうしたらいいのかということが私たちの活動の重要なテーマの一つだと感じています。

だから、会報は、地元の方に全員に読んでいただくように1軒ずつ配っています。ご理解をいただけるようにとの思いですが、もちろん、人はそれぞれです。でも、気持ちよく、いろいろなどころでお目にかかり、気持ちよくお話しさせていただくことができますので、良い関係が広がっているように感じています。

リーフレットは英語版もあるのでよ。

考えて見ると、常に次世代を育てることの大切さを考え工夫を重ね続けてきた結果、若い人たちが入会し、会を支えています。それと同時に地元の人との交流を深めることを大切にしてきました。

### ○大井川知事

先ほど黒田さんがおっしゃっていましたが、大池は、理由もないのに、COD（科学的酸素要求量）とか、そういう汚染が進んでいるというのはなぜなのでしょう。霞ヶ浦の浄化は、私の政策の中でも結構重要な位置づけなので、大変興味があるのですけれども。

### ○黒田氏

おそらく、水質調査だと、2ミリ以上のものは分析対象外なのですが、例えばハスが生えたそういう葉っぱが落ちるだとか、そういうものは全部はかっているのです。そういうものがここに溜まっているのではないかと。霞ヶ浦の部分も、台風とかで、落ち葉だとか、そういうものが流れてきている。しかし、それは実は、水質データでは入ったことになっていないのです。そういう見えないところが、ここでいくと、ぐっとよく見えるようになってくるので。

### ○大井川知事

落ち葉みたいなものが腐ったものもCODの数値を悪くするということなのですか。

### ○黒田氏

はい。まさしく。

### ○大井川知事

でも、逆に言うと、それって本当にそんなに悪いことなのですか。一生懸命、CODを良くしようとして、うちの担当の霞ヶ浦環境科学センターとか頑張っていますけれども。

### ○黒田氏

適度な有機物は魚の餌になるのですが、過度では大池だと夏場は酸素がなくなってし

まうのです。そうすると魚が死んでしまうということも起こるので、それを何とかしないといけない。それをここで解明できれば、ほかのところにも応用できるだろうと。

○大井川知事

でも、せっかく里山だといっている、今度は草刈りに加えて、池の底払いまでやることになったら大変ですよ。

○黒田氏

実際はそれに近いことをやっています。

○及川氏

池のハス刈りというのを 1990 年から 2013 年までやっていました。1 ヘクタールのハスを刈って、池の水面をつくってきたのです。それはすごくエネルギーがかかりました。それによって DO（溶存酸素）が増加したことも調査の結果明らかになっています。この調査は国立環境研究所との共同作業で明らかにできました。

○大井川知事

ハスで覆われてしまうと、生物が。

○及川氏

酸欠になります。

○黒田氏

生物が死にます。花はきれいなのですが、それで有名になってしまうと、今度、大池自体の生態系がよろしくなくなってしまう。

○大井川知事

そうなのですか。なるほど。

○阿部(き)氏

外来魚の駆除とか、そういうのも随分力を入れてやってきました。ただ、こうすればこうとすぐにはわかりません。でも、池のことには随分力を入れてきました。及川さん自らボートを漕いでいますが、私も一時期はボートを漕いでいましたが。ボートを漕いで、網を張って。

○及川氏

今は若者と一緒にやっていますが、年に 80 回ぐらい活動しています。

○佐々木氏

我々は認定NPOになっています。認定NPOでは、相続税が免除されるとか、税額控除されます。あと、今度、ナショナル・トラストを始めるのですが、みなし譲渡課税も認定NPOに適用されるということで、今度の国会で多分通るのではないかということで、我々に少しは追い風が吹いているのではないかというようなところがありますので、微力ながら我々も少しずつ汗をかいていきます。

**○阿部(き)氏**

では、及川さん、最後に。

**○及川氏**

大井川知事、本日ありがとうございました。

会として、この場に参加しているのは10名ですが、さまざまなことに取り組み、より良き里山を目指し保全活動、環境教育活動などを行ってしております。私たちのミッションはこの里山を未来に伝えていくことです。

今後も力強いご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

**○大井川知事**

ありがとうございます。よろしくお願いいたします。